

情報保護は愛国心、
愛社精神から

旧海軍の秘密区分には「軍機」「軍機秘」「機密」「部外秘」があったが、大和は最高の「軍機」に指定された。このように高い秘密区分が武蔵全体に与えられたのは、酸素魚雷や特殊潜航艇だけであった。大和に高い秘密区分を与えたのは、米軍より長射程の四六センチ砲で欧米の四〇センチ砲をアレンジして攻撃し、少ない艦艇で対米優位を確保しようとしたからであった。大和の秘密が漏洩し米国が大和に対抗し、四六センチ砲搭載の戦艦を造られたのでは大和の価値は半減する。少しでも長く秘密を保持できれば、それだけ優位を保持出来る期間が長くなるからであった。

情報の保全はまず味方を騙すことから始まった。海軍は建艦予算から大きさを推測されることを慮れ、大蔵省には三万五〇〇〇トン型戦艦（大和は六万九〇〇〇トン）の建造費を要求。不足分は駆逐艦三種と潜水艦一隻を建造する架空の予算要求をした。

はその後強化され、七月には青年団や学校などで防諜の重要性に関する講演会や、海軍、憲兵隊、呉警察、市役所、郵便局、呉検事局などで軍事防諜団が結成されたが、三十七年に入ると少年愛国防諜団や、情報は幕僚から漏れると、芸妓、料理屋の女将、中居など六四〇名で芸妓防諜団も組織された。

開戦前に得ていた 米軍情報とは

このような厳重な秘密防衛体制から、在日スミス・ハットン海軍武官が行った情報収集の方法は、過去の海軍予算から艦船別建造費や艦種別建造費を割り出し、戦艦の建造費が三十七年から始まった第三次補充計画ではトン当たり三三八〇円、三十九年から始まった第四次計画では三七〇〇円と推算した。そして、一番艦日進（大和）は排水量四万トン、二番艦伊弉（武蔵）以降は四万三〇〇〇トンで、四〇センチ三連装砲架四基二門と推定した。また日本人情報提供者と駐日列国武官などからの情報を総合し、呉、横須賀、長崎と佐世保で四隻が建造中で、日進、紀伊などの四隻は一年夏までに完成し、後続の四隻の戦艦は四三年から四四年に完成すると報告した。これが開戦前に

米側は正確な情報をキャッチした。
だが人種の偏見、壁が正確な情報を遮断した

戦艦大和をめぐる熾烈な日米情報戦 騙し、騙し抜いた日本軍。遂に大和の秘密は守られた

平間洋一の

ヒストリカル ア イ

NEW COLUMN
BY Youichi Hirama
volume 2



（プロフィール）
平間洋一（ひらま よういち）
●歴史学者。元海軍補。元防衛大学校教授。1931年横須賀市出身。1957年防衛大学校（電気工学科）卒。1957年海上自衛隊に入隊。1958年3等海尉任官、同幹部学校指揮幕僚課程、護衛艦「ちとせ」艦長等を経て、1988年退職（海将補）。同年より防衛大学校講師、教授を経て1999年退職。現在は軍事史学会理事、呉市海軍歴史科学館（大和ミュージアム）委員、横須賀市歴史編纂委員会などを務める。
1996年、慶応義塾大学より博士（法学）取得。著書には、『戦艦大和講義』選書メテエ269（編者、講談社2003年）、『日露戦争が変えた世界史』（単著、実業家出版、2004年）。

戦艦大和の情報は日本の堅いガードで開戦までは完璧に守られていた。しかし、戦争が始まり大和が出撃すると、米海軍は写真分析、捕虜訊問、無線傍受などで排水量六万トン、口径四六センチであることを知った。しかし、米海軍が大和の主砲が四六センチであることを知ったのは日本の敗戦後であった。なぜであろうか、大和をめぐる日米の情報戦とその教訓を考えてみたい。

一方、大和を建造する呉海軍工廠では工事に従事する者は誓約書を読み上げ、写真付きの通門証とパスが渡され、さらに大和に工事が入るときにはその都度確認された。特に図面の保管は厳重で、図面もこの部分かがわからないように部分毎に作られ、全体像がわかる一般艦装図面や建造仕様書は造船部長自らが保管し、特に必要と認められたもの以外には閲覧させず、設計室内に機密図書閲覧室を特設して閲覧させ、設計主任が毎日、所蔵図書や図面を点検していた。このため図面を引いた者にすら全体像が判らなかつたと証言している。

また、大和が外部から見えないようにドックの上を上屋を設け周囲をトタン板で囲み、さらにクレインの上から網などをすだれのように吊るし、海上からも山の上からも見えないようにした。これらの処置と平行して防諜対策も強化され、一九三六年一月には呉線の急行列車に憲兵が添乗し、呉に近づくと海側の窓のシャッターを閉めさせていたが、二月には呉が一望できる灰ヶ峰や周辺の山々に特別憲兵隊が配置され、翌三十七年六月には工廠や軍港が見える呉線の海側八五五メートルにトタン板の塙が作られた。防諜体制

米海軍が大和に関して得ていた正確な情報であった。

敵を欺くには味方も欺け

米海軍は一九四二年八月にガダルカナルに上陸すると、ゴミ捨て場など探し大和のスケッチとスケッチを送るとの通信文を拾い出し、四二年一月の『米海軍識別参考』に大和の識別図を掲載し、排水量三万五〇〇〇トン、四〇センチ砲九門搭載として部隊に配布した。これが大和に関する最初の米海軍の情報配布であった。

その後、沈没艦艇が増え捕虜が増えると、捕虜が大和の秘密をべらべらと話し大和の細部が明らかになっていった。ミッドウェー海戦で沈没した巡洋艦三隈の捕虜は大和は五万七〇〇〇トンド、主砲は三連装砲架二基に九門の四六センチ砲を装備し、速力は三〇ノットと証言した。また大和に二三月月勤務したという捕虜は、大和の下士官の間では大和の主砲は「日本海軍の中で最大の四〇センチ砲だ」との冗談が交わされているとも付け加えた。四四年九月には巡洋艦名取の捕虜が、大和の主砲は書類上は四〇センチだが四五センチか、それよりも大きく排水量は最低でも五万トンと証言した。

一九四四年二月四日には偵察機がトラック島で鳥かと思われる不鮮明な写真撮影したが、写真解析から全長二八メートル、船幅三三・五メートル、主砲は四六センチ三連装九門、副砲は二〇センチと二センチ、最低でも六万トンと判定した。六万トンというのは四六センチ砲を搭載可能な最低限の必要排水量であった。しかし、米海軍が造れるはずはないと、日本人に対する人種の偏見から捕虜が誇張しているのではと疑っていた。さらに、米海軍が四〇センチ砲に拘ったのは日本海軍がドイツに知らせた大和は四万二〇〇〇トン、全長二三・五メートル（実際は二六・三メートル）、主砲の口径四〇センチとの電報を解読したため、まさか同盟国にワンの情報を知らせるとは考えもつかなかつたからであった。

大和が教える 「思い込み」の怖さ

中国新聞記者の御田重三氏は呉市民の間では、「今、工廠で沈没戦艦を造っている。あるいはどこでもない戦艦を建造している」となどは公然と口にし、多くの市民が大和を建造していることは知っていた。しかし、当時の

国民は「何が国家の秘密か」「何を喋つたら日本に不利か」という自覚を持つていなかったから、政府が「これは秘密だ」といへば忠実に守った。国を売ろうな行為はまずやらなかつた」と述べている。このような呉市民、いや長崎を含めた当時の日本人の祖国愛が大和や武蔵の秘密を守り抜いたのであった。しかし、捕虜になるとべらべらと価値観を一八〇度転換して勝者にへつらう軍人の裏切りには義憤を感じる。しかし、勝者へのへつらいや価値観の反転は軍人だけではなかつた。勝者へのへつらいは「一億総懺悔」と、占領軍の指導に従い憲法から教育法、皇室典範などを喜んで改悪し、戦後六〇年間も守り続けている日本の現状を見れば日本人全部に言えることではないであらうか。

一方、米海軍が大和の真の能力を解明できなかったのは二つの「思い込み」にあった。第一は米国が完成していない巨砲を日本が製造できるはずはないという人種の偏見であり、第二は現実の写真や捕虜の証言よりもドイツに伝えた解読電報の方が正しいとの「思い込み」であった。戒めべきことは偏見という何等の根拠がない「思い込み」ではないであらうか。